

---

# 使えない一人称は異世界にて

黒崎 達哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

使えない一人称は異世界にて

### 【NZコード】

NZ5538N

### 【作者名】

黒崎 達哉

### 【あらすじ】

対人恐怖症で、記憶障害で、神様信仰で、父親が武道家な俺、

咲野 姫葉が突然降り掛かつた大爆発により、少しの知り合いと共に異世界に飛ばされます！！飛ばされた先の世界はファンタジー詰め合わせのロマン世界！？家のしがらみから逃れる事に成功し、開放感MAXの俺。だが、それは実は仕組まれていた事で……何だか俺が僕じゃない……。

主人公が神様に願った事が叶う話。だけど神様も万能ではなくて

…。

## 第一話 告つてつられた……

俺は「ぐく普通の高校生。  
名前は咲野 姫葉。

すいません。嘘です。開幕から嘘つきました。はい。真っ赤な嘘です。普通になりたいだけです。まず、名前が女々しいとは思わないでください。結構コンプレックスです。

まず、俺が普通ではない理由ですが……記憶障害。

記憶障害とは、記憶を思い出すことができない、また、新たに覚えることができないなどという、記憶に関する障害の総称である。一時的に思い出すことができない記憶は短期記憶障害、長期間思い出すことができない記憶は長期記憶障害と、一通りに分ける。

俺の場合、過去の記憶。医者が言つには過去の精神的ストレスが原因で記憶が欠損してゐるんだと。まあ当てはめると短期記憶障害になる。

いやね？これだけなら俺も全然OKなんだよ？  
だけどな……俺はこの記憶障害のせい……

……対人恐怖症なんだあああア！！！

対人恐怖症。聞いた事ぐらいあるだろ？

家族とケンジ（家のバカ犬）に近所の麻希姉は大丈夫なんだよ？  
でもな…他人と話そうとするとな…足はガクガク、心臓ドキドキ、  
焦点グルグル。

もうね…嫌だ。

でもな…俺が普通ではないっていうのは実はこれだけではない…。

ウチの親父…武道家…咲夜流肢牙爪一刀術の師範代…って言つて  
も俺に無理やり教え込んでるだけに物凄いタチの悪さだ。

本当ね…毎朝毎朝稽古稽古…毎夜毎夜稽古稽古…毎週土日も稽古  
稽古…。

ふざけんな！！！

俺は高校生だぞ！？青春という甘くほろ苦い一時を謳歌する僕き  
旅人だぞ！？可愛い子には旅をさせろって先人も言つたじゃねーか  
！？俺は別に可愛い子じやねーけどなー！

という訳で告白する事に決めた。

え？いきなりなんだつて？死ねつて？そ、そこまで言わなくともい  
いだろーがー！

告白する理由は簡単簡単。青春を謳歌するのと、俺の虚しすぎる  
対人恐怖症を克服するためだ！

よし、いざゆかん！！

てかもつ学校遅れる！早く行かねば！

。 。 。

教室で一人の女子生徒を見つめていた。その女子生徒は学校で大人気を誇る、倉月 優花その人だ。黒髪の、絶対に和服が似合つ清純派美少女だ。あの人に告白しようと思つています。はい。

え？無理だつて？んな事してる暇が有つたら、とつとと死ねつて？さ、さつきから何お前！？なんか俺を殺したがつてない！？ちょっとマジで怖いんですけど！-

…あ～本当に…倉月さんと付き合えたら絶対幸せだろうな～。…よし…思い立つたが吉日だ！…ぜつてー彼女にしてやるぜ！-

そつ考へたらなんだ！？セリフだ！

。 。 。

やばい呼び出してしまつた…。放課後屋上に来てつて…。

優しくわかつた。つていつてくれた時の笑顔…ちゅう燃えるぜーーー！

そして、屋上で一人テンションあげあげの俺の耳に、錆びたドアが開く音がする。そちらに目線を送ると、倉月さんが。

が開く音がする。そちらに目線を送ると、倉月さんが。

途端に直接心臓を掴まれてる様な感覚。頭が熱くなり、吐き気がこみ上げる。対人恐怖症のありがたい恩恵だ。

だが、それでも歩いて倉用さんの前へと歩いて行く。苦しみに耐える俺…。結構いけるんじゃないか？苦しみが恐怖症だけになんか馬鹿らしげど。

「ぐ、ぐ、倉用さん。」

ぐわ。やっぱ舌が思った通りに動かない。虚しいものだぜ。

「何？」

だが、倉用さんは気にせず笑顔を向けてくれている。口元で言わずしてなんと呟つー。

「す、好きです……ほ、僕とつ、き、付き合つて下さー……」

言つた――――心臓がバクバク言い過ぎて胸を突き破りそうだ。  
あー答えはー！？

「『めんなさい…。』

がはつづつ……『姫葉に9999のダメージ』

な、なんでだ…。

「『めん…あたし…男らしい人が好きなの……』

KOー！『姫葉は息絶えた』

俺に背中を向けて走り去つて行く倉用さん。

しょ、じょうがないだろ！？俺だつて男らしくなりてーよー！で  
も無理なんだよ！人が前にいると、どうしてもああいう風になつ  
ちゃうんだよ！

「へや…」

俺は滲んできた涙の雲を振り払つと、屋上をトボトボと歩いて出  
て行つた。

## 第一話 スーパーエクスプロージョン

俺は今、自分の部屋のベッドの上で涙を流している。

”男らしい人が好きなの”

その言葉が俺の心を深く抉つては脳でフラッシュバックする。

「ちくしょう……あ～男らしくなりたい……てか、対人恐怖症を治したい……」

俺の悲痛な魂の呴きは部屋の壁に染み込んでは儚く消えた。

「あ、そういうや、まだ”アレ”やつてなかつたな……」

。 。 。

赤くなつた目で俺は今家の裏にある祠に来ている。祠にある戸を開けると、中には俺が12歳の時から一日もおこたわらず見てきた絵画が有つた。

天照大神……。

俺はこの神様が一番好きであった。ギリシャ神話や、北欧神話、中国神話など全てを合わせた中で。

天照大神とは、太陽を神格化した神であり、皇室の祖神（皇祖神）

の一柱とされる信仰の対象だ。

「…………

因みに俺は天照皇大神宮教てんしょうじょうたいじんぐうきょうに属している。まあ、その事も関係あるって事さ。

俺は目を閉じて祈りを捧げる。何を祈つてるかって?別に……対人恐怖症が治ります様にってね。虚しい……。

そのまま五分ほど祠の前で手を合わせて祈つていた。嫌な事があつた時にこつしてると氣分がよくなるのだ。そして、俺はゆっくりと目を開けた。

今では俺が掃除している祠祠……。これだけが俺の自慢できる事だ。

「姫葉! 稽古を始めるぞ!」

「はいはい。」

俺は憂鬱感で押し潰されそうになる心をどうにか持ちこたえて、庭にある道場へと向かう。

『願いを叶えてやる!』

呟く様な小さい声が聞こえた様な気がした。だが、それはとてもじゃないが、全てを聞き取れなかつた。

。 。 。  
唸りを上げた拳が俺の顔面のすぐ横を通り過ぎる。どうにか首を傾けて回避したが、まだ親父の攻撃は終わらない。拳を繰り出した勢いで体をひねりながら下段蹴り。膝裏に入つた蹴りが俺の足を挫く。

蹴りの食らつたことでこけそうになるが、俺は手をついて真上にある親父の顔面に蹴りを放つ。

だがその蹴りは容易く掴まる。いや、その蹴りは囮だ、と言わんばかりに、もう一方の足を高速で振り上げ、かかと落としを脳天に食らわす。

当たつた！！

そう思つたが、親父は掴んでいた足を捻つて俺の体を崩す事で、蹴りの軌道を曲げた。

クソ、化け物親父が！

。 。 。

「今日はここまでだ。」

俺は道場で一人で蹲つてる。

そりゃそうだ。俺が腹に食らったのは咲夜流奥義。鬼咲剛衝。

咲夜流に伝わる独自の呼吸法で一部だけ、一時的にミッターを外す技。

俺が食らったのは3ある内のリミッター1。だがそれでも、ガードを突き破つて悶絶せしめる程の威力はもつている。

どうにか反応して咲夜流剛体法を腹に掛けたが、無理でした。痛いものは痛い。

苦しい。

じつと痛みが和らぐのを待っていた俺の耳に道場のドアを開ける音がした。

「うわ…。」

「うわじゃねーよ…」

入って来たのは近所の麻希姉だ。茶色い髪をセミロングにしている愛らしいその姿は俺をおちよくるためだけに産まれたに違いない。

「何? 芋虫?」

「芋虫じゅねーよ…まあ、ぽいけどさー」

「あ、が、」

腹が痛くて喋れねーーー！

「うん。うん。わかった。」

何を分かつたんだ！？教えてくれーいや、教えてくださいー！？

「買い物に付き合つてくれると……。」

違うわ、バカ！ーでか、お前の買い物は買い物つて言えねーだろ！  
！いつもいつも、キモいぐらい買いやがつてーーちょっと可愛いから  
らつて調子にのんな！？学校で嫌な噂広げるぞ！？いやマジで！？

そう思つてたら、腹を蹴られた。  
泣ける…………。ってなんでだよ！？

「なんか……ムカついたつていうかね？」

理不尽すぎる…………。しかも顔が怖い。

。 。 。

「憂鬱だ……」

俺はまた登校時間になり学校へと向かっている。麻希姉のカバン  
を持つたまま。

隣を行く麻希姉は俺を奴隸として扱うのに優越感を抱いているの  
か、なんだか嬉しそう。

「ああ、憂鬱だ…」

俺の目に見える落胆の仕方をみると、肘鉄を脇腹に食らわしていく  
る麻希姉。

「あんまり一緒にいる時に、憂鬱憂鬱だ、言われると何かムカつく  
んだけど。とかどうしたの?」

「フられた…」

「は?」

「告つたら…フられた。」

「ああ……なんかドンマイ。」

「慰めてくれんの?」

「社交辞令。」

くわ…

。 。 。

教室で一人窓越しの空を眺めている。倉月さんはいつも通り、品  
のある笑顔で友達と語り合っている。そつ…いつも通り。

もう嫌だ……死にたい。……「ゴメン今のはウソ。嫌だ、死にたくない。

そんな何か、逃げ場のない風な感じで、空を眺めていた俺。ぼーっとしたままだったが、その状況は空から降つてくる一筋の光を見て壊された。

「何だあれ……？」

他にもみた奴がいるのか、口々にそんな事を言つてゐる。何か嫌な予感……。俺の嫌な予感は大抵当たる。

「うわ！」

一瞬にして半端ではない眩しさが俺の目に入つてくる。

その直後……

大爆発が起きた……。

ドツッガアアアアン！！

その爆発は一キロ先から始まる、ついには校舎を丸々飲み込んだ。

うん。これ死んだね。



## 第三話 姫から鬼へ

眠い……。気持ちがいい。肌に伝わる爽やかな風が、俺の体全体を包み込んでいる様だ。

俺は寝返りをうつ。そこには、俺の抱き枕があるはずだ。  
すると、何故か腕に伝わる感触はとても布ではない柔らかさだった。

ん? 何だこれ。なんかムニュムニュしててすげー肌触りがいい。  
ずっと触ってたいくらいだ。手のひらサイズのプリンの様な…  
俺はそれをずっと触っていた。

「あ、あ、あやあああー」

(「あー! ? 何だ何だ! ? )

そう思い俺は寝ていた体を起こす。

すると、俺の目の前にいるのは、自分の体を抱きしめている倉田優花さん、その人だった。

何故?

「あ、あの?」

俺が手を伸ばすと、ビクッとなつて後ずさる倉田さん。

何だらう?・心が痛い。

俺は立ち上がりつつて辺りを見回して見る。すると、どこかの森の中だという事がわかる。人は俺と倉月さんだけ。

俺が触ったのはもしかして…

いやいや、そんな訳ないじゃないですか。いやいや、あります  
ん。…よし！本人に聞いてみよう！

「ね、ねえ？」

ビク！

「もしかして僕さ？」

ビクビク！

ん。 オカもう…わかった。うん。…話しかける度にビクビクすんだも

分かりやす過ぎて、逆にハートが痛い。

「あのや... いじつてどうなんだうつね?」

マジでどこだろう。こんな密林、近所にはないはずだ。あ、でも車で1時間程走らせたとこに山があつたな。てか、俺冷静だな。

「え？……あ、あたしも知りません…」

ぐは！？

「倉月さん……わざとじゃないんです。すいません。」

敬語で話しかけられるのがこんなにキツイとは思わなかつた。もはや心臓を突き破つて地平線の彼方まで飛んでいつてしまう程の攻撃力だ。

「え……わざとじゃないの？」

わざとだと思われてたんだ……これで倉月さんの中での俺のイメージが分かるから痛すぎる。

「わ、わざとじゃないで、す。」

何か嘘ついてる様な文面になつたが、これは対人恐怖症のせいだ。断じて！わざとではない！……それにしても大きかつたな……。

「今失礼な事考えなかつた？」

ムスッとした顔で言ひ倉月さん。可愛いだけにフられた事が虚しい。

「ま、まあ、いいや。と、とりあえず、ほ、他にも人がいなか、僕が見てくるから……その……」「」、『』で待つて……。

くそ……文章が途切れ途切れだ。伝わつてゐのかも分からんぐらいだ。

「ありがとう。咲野くん……でも、やつぱりあたしも行く。」

「あ……う、うん。」

。 。 。  
それにしても……他にはいなそうだな。俺と倉月さんは並んで20分程近辺を探したが、どこにも人の姿はなかつた。

「?咲野くん?その手どうしたの?」

倉月さんが俺の手を指差しながら言つ。そこで俺は初めて手の違和感に気がついた。

「?」

俺の手の甲には姫、という漢字が大きく彫った様にあつた。

「な、何だよこれ…?」

「……怖いよ……」

俺は倉月さんの言葉にえ?と顔を見てしまつた。

「な、何なの?は…!怖い…家に帰りたいよ。」

そう言つて涙を流す倉月さん。その体は縮こまつて細かに震えており、小動物の様なイメージだ。守つてあげたい!…そう思つた。そして、俺はその震える背中をずっとさすつていた。

。 。  
夜になつた。ここで親父の教えが人生において初めて役に立つた。  
因みにそれはサバイバル能力。

「い、一応何か食べとかないと……い、いけないから。な、何か動物  
がいれば、いいんだ、けど。」

倉月さんはつけた火の前で体育座りをしている。目が赤くて何だ  
か見ていられない。

俺はどうなのだろうか？こんなところにいきなり連れてこられて…  
…何故パニックにならないんだろう。

いや、多分パニックになりすぎて逆にってやつだな。

「じゃあ、倉月さんは…火をま、守つて…僕が、な、何か動物  
でも捕まえて、くるから。」

「うん。ゴメンね、咲野くん。」

。 。  
いた！！

俺はその体を引っつかむ。

よつしゃあああー! 晩飯GETだぜーー!

その白い体から読み取ると、多分ウサギだろ?。首根っこを掴んで宙ぶらりの状態。

よし…これで飯にありつ…ん?

ちょ、ちょっと待て…このウサギ何か角生えてるんですけどー!?

い、痛てて!

か、噉んでる!?<sup>レ</sup>超ガジガジしてん!

は、早く戻らなきゃ…食いちぎられる!?

その時だ。俺の耳に女性特有の高い悲鳴が聞こえたのは。

「な、何だ!?

俺は駆け出していた。そうだ、悲鳴が聞こえたのは倉用さんのいる方向だ。

ハアハア。

息を切らしながら森を突き進んで行く。

そして、火をつけた場所……

……緑色の人間?がいた。

俺は持っていたウサギ（角持ち）を取り落とす。緑色の人間？は六人いて、鏽びた斧や、剣を持っている。みな一様に醜い顔をしている。

そして、そのうちの一人が、倉月さんを組み伏せているのが見えた。布の様なもので猿ぐつわをしているが、倉月さんの顔は恐怖に歪んでいる。

（な、何なんだよ、こいつら！？人間じゃない…！？てか、怖え！）

「んんむ…！」

倉月さんが呻き声を上げる。どうやら、体をまさぐられている様だ。制服とYシャツを脱がされ、上は下着だけの姿になっている。

「や、やめる…！」

俺は動物を捕まえるために持っていた木の棒を振り上げて緑色の化物に立ち向かう。

力一杯振り下げる木の棒。確実に当たったと思った。

だが、緑色の化物は斧を頭上に掲げ、木の棒での打撃を防いでいた。斧の刃の部分で受け止められたからだ。木の棒は真ん中から折れてしまった。

「く、くそ…！」

そのままその一匹に蹴りを放つ。だが、その蹴りはいとも容易く

足首を掴まれる事で防がれた。

そして、死角から到来する棍棒。

それは気づいた時には、もう俺の頭を力一杯ぶつ叩いていた。

「がは！」

視界の端に紅い血液が舞つたのが見えた。

気を失いそうになる俺の頭は続けて何度も到来する棍棒や剣や斧によつて、気絶と覚醒を繰り返した。

剣は肩口を深く抉り、斧は脇腹にめり込む。棍棒は体全体をまんべんなく打ち付けられた。

化物の向こう側で泣き叫ぶ倉月さんの姿が見えた。涙が頬に伝い、とても悲痛な顔をしている。服などはほとんど脱がされ最早下着だけの状態だ。

倉月さんを組み伏せてる化物が、腰に巻いていた布を取り払ったのが見えた。

倉月さんの顔に目に見えて恐怖が宿る。

（くそ……体が動かねえ……。）

意識すると鈍い痛みが体全体を支配し、ズキズキと脳を焼く。

「いやあ。助け……て……。」

倉月さんのSOS。

(「くそ……動け……動けよ！助けるんだよ！……」) 事を聞けよ……)

残りの化物達も、もう俺が瀕死だという事が分かったのか、倉月さんの揃つて方へと歩いて行く。

(ちくしょう……なんで俺は……)

『助けてーか?』

(助けたいに決まってるだろ……)

『覚悟はあんのか？ 理由は？』

(んなもん必要ねーよ……助けたいから助ける……それだけだ……)

『…………ハ、ハ、ハハハ。契約は完了だ。ここからは……オレの出番だ……。』

脳に響いていた声が、途端に大きくなつたような気がした。

その途端に俺の体に湧き上がる力。傷がどんどんと治癒して行く。

それと同時に、左手に感じる鈍い痛み。

そこについた、『姫』という文字は、炎を灯した様にパチパチと音を立てて姿を変える。

一秒後。その手にあつたのは……

『鬼』という文字だつた。

「ハハハハ……。」

一斉に俺の方を振り向く、醜い顔ぶれと整った倉月の顔。

「お前、ひ……」

立ち上がった俺を再び倒そうと、数匹の化物が到来する。

「死んでみるか……？」

俺はそれだけいようと、走り出す。

右から斧。左から剣が来るが俺は避けて、右の斧持ちの顔面に貫手を打ち込む。

右の眼球を真ん中から真つ二つにして、そのまま、後頭部を突き破る。

左から来る剣を、貫いた化物バリアで防ぐ。

「キシャアアアー！！」

甲高い叫び声をあげて生き絶えた化物。その化物が倒れる時、手に持っていた斧をぶん取る。

剣持ちの頭頂部へと思い切り叩きつけようと、剣持ちは脳みそを撒き散らしながら、地面に顔面を打ち付けるように倒れる。

「フン……クズが……すぐに肉塊に変えてやるよ……」

「クキシシャアア！」

残りは四匹。まず前方の一匹のうちの一匹に箭をぶん投げる。見事に顔面くと飛んで行き、顔を綺麗に一等分した。

仲間が殺された事で隣の一匹がそれから口元を向いた。その隙を逃さずその頭を掴むと地面に叩きつける。

「おいおい……本来で来いよ……？」

叩きつけた化物は吐血しながら立とうとするが、俺がその背中に座る事で、立つ事ができない。それでも尚暴れる化物の両手を手を鍵型にしてくり抜く。

「ハギヤアアアア！」

悲鳴がつるさかつた。とりあえず、首の骨を片腕で折る。

残りは一匹。

「血が足りないな……」

尻の下にある化物の首を手刀で貫ぐと、血が滴る体をそのまま持ち上げる。頭と胴を掴んで引っ張るといとも容易くブチブチと音を立てて、分裂した。

その手に付着した血液を舐める。

「お前ら……不味いんだよ……」

残りの一匹が武器を振りかぶつて攻撃して来る。

まず一匹の剣を足で弾いて、もう一方の奴の剣は刃を掘んで顔面に拳を叩き込む。手放した剣を取つて、腹に突き刺す。

瞬く間に自分以外いなくなつた事を知ると、化物は慌てて引き返そうとする。

その背中に、俺は思い切り剣を投擲した。

。 。 。

血に染まつた草原で、一人の男女は見つめあつて立つていた。

「咲野くん……？」

その一方が男に尋ねる。

「ああ？誰だそれ？”オレ”の名前は『鬼葉』だ。咲野なんかじゃねえ。」

「え？」

「…ああ？お前が言つてるのはこの”入れ物”の事か？…ふ。まあいい。もう時間だ。”俺”に言つとけ。次はもっと楽しませろつてな。」

そう言つて咲野くんは、倒れこむ。

火に、水をかけた様な音がなり、左手の文字が変わった。

あれは誰だつたのだろうか？喋る時に見えた、異常に長い犬歯を不思議に思いながら、気絶した咲野くんを膝枕で看病していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5538z/>

---

使えない一人称は異世界にて

2011年12月19日18時01分発行